

すぎたにつき

#25 杉田日記

作者：清水浜臣（しみず・はまおみ 1776-1824）

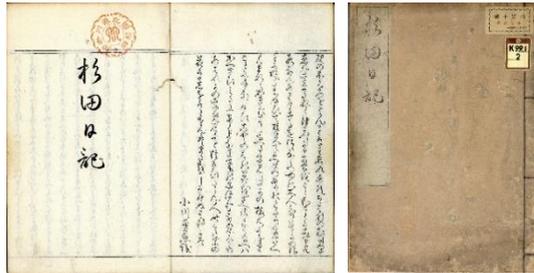
刊行：文化7年（1810）



📖 解題

■ 内容

作者清水浜臣が、文化4年(1807)春、江戸を立って3泊4日の行程で蒲田（現・東京都大田区）、杉田（現・横浜市磯子区）の梅園に遊んだ時の紀行文で、自作の長歌が一首詠



[K99. 1/2]

まれている。杉田までの地名も詳しく書かれ、作者が記した沿道や船上よりの風景から、開港する50年前の横浜の姿がわかり、興味深い。文化7年(1810)に万笈堂（英平吉）より出版された。序文小川勇魚、跋文藤原周之。後刷が天保7年(1836)5月山城屋佐兵衛・山城屋新兵衛により刊行されている。

杉田の梅林は、佐藤一斎の『杉田村観梅記』、清水浜臣のこの紀行文でその名が全国に伝わり、明治から昭和初期にわたって観梅の名勝地として知られた。このことから明治29年（1896）には、地元杉田の妙法寺智旭が永勢子行の協力を得て「杉田日記」など杉田梅林の書物を集めた梅の杉田の詩文集『杉田勝概』を出版した。

■ 作者

■ 作者

作者は清水浜臣。通称玄長といい、月齋・泊泊舎（ささなみのや）などと号した。江戸の医師の家に生まれ医を業とし、江戸後期の古典学者・文人・歌人として名高い。『万葉集考註』など学書の著が多く、歌文集、雑著などを含

め 130 に及ぶ著作がある。

『神奈川県郷土資料集成 第6輯』の解題によると、序文の小川勇魚は、後に保土ヶ谷に住した山平伴鹿である。山平伴鹿は本姓小川、号は浄月、柿園など。清水浜臣と交友があり、文政12年（1829）に47歳で没している。門人に岡野新田の開発に携わった岡野良親などがある（『横浜史料目録 第2輯』）。

本文を読む

< 翻刻 >

「杉田日記」（『杉田勝概』永勢子行編 振風學舎 1896）[K291.16/2]

「杉田日記」（『続帝國文庫』第24集 岸上質軒校訂 博文館 1912）[918/8/24]

「杉田日記」（『神奈川県郷土資料集成 第6輯 相模国紀行文集』神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会 1969）[K08/1/6] [K99/45/1]

「杉田日記」（『日本紀行文集成』第3巻 岸上質軒校訂 日本図書センター 1979）[915.5/16/3]

参考文献

『横浜史料目録 第2輯（横浜名家著述目録）』横浜市市民局市民課横浜開港百年史編纂室編・刊 1952 [K27.1/2/2]

『泊酒舎年譜』丸山季夫著・刊 1964 [121.2/20]